Good bye days～それでも僕たちは生きていく～

遠野簾助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｇｏｏｄ　ｂｙｅ　ｄａｙｓ～それでも僕たちは生きていく～

【Ｎコード】
Ｎ２５４０ＢＡ

【作者名】
遠野簾助

【あらすじ】
高度な文明が発展した都市エルリアに起こる原因不明の事件の数々。それを解決するために学園ヴァレイに設置されたクラスＳ。突如クラスＳに振り分けられた水城テッペイとその仲間たちを待ち受けるものとは？数奇な運命に手繰り寄せられた者たちの戦いの物語が始まる――――

prologue?

そこは戦場だった。

荒れ果てた大地が渇いた風の音が無数の骸がそれの凄惨さを物語っていた。

そして骸の丘に一人、血まみれの青年が傷一つない剣を支えに立っていた。

「そうだ…この夢を俺は知ってる…。」

徐々に俺が自我を意識するにつれて、その風景は遠ざかっていく。

ジリリリ!!ジリリリ!!

「うわっ!!!!!」

驚いた青年がびくんと体を震わせ、ベッドから起き上がり自分の部屋を後にする。

「うう…おはよう母さん」

「おはよう、急がないと始業式遅れるわよ?」

「始業式は九時までに登校すればいいんだし大丈夫だよ」

そう言って青年が時計へと目線を移すと時計の針は八時半を指差していた

「あれ？？？」

「あれじゃないわ。早く学校行きなさい。始業式早々遅刻だなんて恥ずかしくて仕方ないわ」

「そうだな…それじゃ行ってくるよ！！」

言うなり青年は勢いよく家を飛び出した。

俺の名前はテッペイ。

水城テッペイだ。

この春から学園ヴァレイの二回生になる至って普通の学生だ。俺の住む都市エルリアは高度な科学が発展した世界有数の科学都市なんだ。

「ちょっ…ちょっとそこのエアキャブ待て待て！！」

エアキャブって言うのは空飛ぶバスみたいなやつだ。移動手段には欠かせない乗り物だ。

「ふーっ…ほんとに遅れるかと思った…」

「また飛び込み乗車かぁ。二回生になっても相変わらずだねテッペイ。」

「おお、ケイゴ！！おはよう！！」

嘲笑気味に俺に話しかけた少し背の小さい青年。俺の友達、多蕗ケイゴだ。

「今日は始業式だけじゃなくて、クラス分けもあるから楽しみだよね。」

「そうだったな！！いやぁ…一回生の振り分け試験を思い出すな…」

「最下クラスのクラスFのままか、それともクラスEか、楽しみだね。」

「そうだな。おっ、そろそろ着くぞ。」

エアキャブがヴァレイの入口に近づくと勢いよく二人は飛び降りた。

「よっと！！…相変わらず慣れないよなこの降り方。」「それより早く行こう。ほらあそこ！！人が集まってるよ！！新しいクラス表だよ。」

そう言うなりクラス表に群がる生徒たちを押し退け二人は前へと身を乗り出す。

「えーと…Fには…ない！？」

「おお！！やったね、Dに昇格だね！！」

「いや…ちょっと待て、Dにもいないけど俺たち…」

「ええ！？なんで！？…まさか留年…？」

「そ…そんな訳ないだろ。ちゃんと証書だって届いてるし…」

クラス表を見直すが俺とケイゴの名前はない。念のため全てのクラ

スの座席表を慎重に見ると、なんとか俺とケイゴの名前が書いてあった。

「おいおいケイゴ、よく見てみろ。俺たちの名前ならここに書いてあるって。」

俺が安堵の息を漏らすとその傍らでケイゴが不意をつかれたように目を疑わせていた。

「テッペイ…テッペイこそよく見てみなよこのクラス…」

そういやクラスを見るのを忘れていた。自分の座席表からクラス一覧へ目をやるとそこには…

「クラス…S…？」

クラスS…それは生徒たちの間で存在すら確かではないと言われている幻のクラスだ。教室すら知られずそのクラスに割り振られた生徒の姿を見ることも叶わない。都市伝説のようなクラスである。

「ほんとに実在してたのか…クラスS。てか教室は！？どこ行きゃいいんだよ！？そもそも俺クラスSに行くような成績じゃねーよ！？」

「噂だけどクラスSって成績とか関係ないらしいって聞いたことあるよ。」

「ますますわからねぇ…はぁ、とりあえず体育館で始業式始まるから行こうぜ。」

とぼとぼと二人は体育館へ向かった。その後始業式は通常どおり執り行われ、終わりとともに生徒は新しいクラスへと向かっていった。

「おいおい…どうすりゃいいんだよ…」

「困ったね…」

二人が途方に暮れながら体育館に残っているといきなり体育館の入口のドアが閉まった。

バタンッ！！

「！？…誰だ！？…？…誰もいないのか？」

恐る恐る入口へ近づくと床から白いガスが噴き出してきた。

「うわっ…！！！なんだこれ…意識が…とお…く」

「テッペイ！！しっかり…！！うぅ…俺も…」

床に臥せる二人。

突如襲い掛かる罠。

彼らの日常は少しずつ歪んでいく。誰にも気づかれることなく。不思議な運命に手繰り寄せられながら。

prologue?

薄暗い部屋。無骨な造りの椅子に持たれる男二人が重々しげに話をしている。

「首尾はどうだ？」

「はい…滞りなく。先程校内にいる最後のエレメンツ保持者たちを確保しました。」

「そうか。ご苦労だったな。そこのエレメンツ保持者のデータをまとめた資料を取ってくれないか？」

「はい。こちらですね。」

片方の若い男がもう片方の年配の男に資料を渡した。

「ふむ…水城テッペイ、多蕗ケイゴか…全く、エレメンツの素養がなかったら落ちこぼれもいいとこだな。」

年配の男ががっかりしたようにそう言うと申し訳なさそうに若い男が答えた。

「はい、今回はエレメンツ保持者自体の数も少ないですから。やはり無理があったのかもしれません…」

「仕方ない。無いものを悔いてもどうしようもないな。ではこの二人が目覚め次第“ホームルーム”を始めろ」

「了解しました。我が主よ。」

若い男が頭を下げ部屋を出ていく。

そして部屋に残された男は深く溜め息をついてから呟いた。

「あれから一年、か。長かったのか短かったのか。お前はどう思う？エルリア…」

「あれ…？ここは？」

テッペイが目覚めるとここが先程の体育館ではなく見覚えの無い大広間だと気づいた。

「おお！！やっと起きたか！！おいケイゴ！！テッペイがやっと起きたぞ！！」

雑に制服を着る派手な男がやかましくケイゴに叫んだ。

「お前は…コウヘイか？」

「おいおいなんだよ？頭、大丈夫か？しっかりしろよ」

ぽんと頭を叩く男。コイツは日ノ岡コウヘイ。俺が所属している部活のチームメイトだ。俺と同じレベルの馬鹿だが誰よりも熱い男だと俺は思っている。

「ああ、なんとかな。ったくそれよりなんだよさっきのは！！だいたいここはどこなんだ？」

「いや、それがわかんねぇんだよ。俺もさっきここで目を覚ましたばっかだからな！！」

「ん？コウヘイ、お前もあの変な煙りで眠らされたのか？」

「変な煙り？何のことだ？俺、ちょっと早く学校来ちまってな、屋上で寝てたんだよ。それで目覚めたらここにいたわけだ。」

「そうだったのか。てかお前じゃあ始業式はどうしたんだ？」

「始業式…？ああ、そんなのもあったな。俺そういう面倒なの疲れるし出るつもりなかったのにな。」

「いや…始業式はもう終わってるから…」

「そうなのか？だいたい今何時なんだ？ここ時計もないし窓もないから時間が全然わかんねぇ」そういえばこの部屋は何か変だ。第一扉がない。一体俺達はどうやってここに集められたんだろうか？窓もないし、何というか…外からの何かを隠すような、嫌な感じがする。

「俺が目を覚ましてからもう1時間は過ぎてる気がするな。なぁケ

イゴ！！」

「そうだね。いい加減うんざりしてきたよ。」

そういって不満をこぼしていると大広間の壁が開かれ扉のように通路が開かれた。

ゴゴゴゴゴ…

「うわっ！！なんか開いた！！」

「ほんとだ…でもなんか、怖いよね」

「うーん…でもまぁ進むしかないだろ。ここにずっといるのも飽きたとこだしな」

彼らが大広間から通路へ抜けると大広間への扉が閉じた。

「戻れないってことか…まぁ進むしかないわけだしいいさ、行こうぜ」

歩みを進めているとコウヘイが何かに気がついたかのように叫んだ。

「あれって出口じゃないのか！！？」

三人が目を凝らすとたしかに通路の先に光が射していた。

「外だ！！やっと出られるね！！」

「ああ、さぁ早く急ごうぜ！！」

三人は駆ける。やっと見えた出口を目指して。そしてついに出口を抜けたのだった。

「うわっ…眩しい」

「よく見えねぇなこりゃ」

目が眩しさに慣れてくると三人は違和感を覚えてた。

「ん？ここって…」

「教室なのか…？」

するとその教室らしき部屋の奥に何人か人がいるのが見えた。

「おーい！遅いよー！！早くしないとホームルーム始まっちゃうよ？」

学生服を着た明るい女子生徒が三人を呼んだ。

「えーと…どういうこと？」

三人が途方に暮れていると冷ややかな鋭い声が教室らしき部屋に響いた。

「ようやく揃ったようだな。これより、クラスＳのホームルームを始める」

prologue?

「な…何なんだよお前」

テッペイは突如現れた男にどこか違和感を覚えた。

（こいつ…何か違う。何かが人間と違う…）

「ほう、不確かながらも俺のエレメンツを感じ取るとはな。どうやらただの落ちこぼれではないようだ。」

「何をっ！？？」

「まぁいい、お前の感じた“それ”についてもおいおい説明する。それよりまずはホームルームを始めんことにはな。まぁ座れ」

男はそう言うと教室に相応しくない上質だと思われる椅子に腰を掛け話を進めた。

「ようこそクラスSへ。俺が君たちの担任の桐生サクマだ。これから卒業までよろしく頼む。」

桐生からの挨拶が済むとさきほどの明るい女子生徒が不思議そうに尋ねた。

「あのー桐生先生？私たち二回生ですよ？卒業までってのはどういう…」

すると待っていたかのように桐生は冷ややかに微笑み生徒の問いに答えた。

「ああ、君たちは卒業までの間はずっとクラスSだからね。ちなみに君たちクラスSは今日を以てここで衣食住を行ってもらうから。」

「はぁぁぁぁ！？？なんだそれ！？聞いてねぇよ！！！」

コウヘイの激怒につれて他の生徒たちも怒りをぶつけた。

「だいたいこんな教室で何が出来るんだ！！」

「そうよ！！いきなりこんなところに連れて来られて、早く家に帰りたい！！」

混乱する生徒たちに桐生が淡々と説明を続ける。

「安心しろ。クラスS専用の学生寮もあれば食堂、風呂、図書館など衣食住には困らないよう設備を用意してある。無論既に君たちの親御さんにも連絡はしてあるから安心したまえ。だからここでの生活について心配する必要はない。」

ドヤッと無神経そうに桐生が喋り終わるととうとう我慢の限界を迎えたコウヘイが桐生へ進み出た。

「はぁ！？何なんだよお前は！？俺は俺の自由にやらせてもらうぜ。だからさっさとここから出せ！！」

コウヘイは桐生への嫌悪感を剥き出しにして睨めつける。

「？…私はお前たちの担任だが？」
「いやそうじゃねぇよ！！つうかふざけんのも大概にしろよなっ！！」
そういうなりコウヘイが桐生の胸倉をつかみ掛かった。しかし胸倉をつかんでいたはずのコウヘイの身体がすぅっと宙を舞い身体が逆さまなって頭から廊下へ激突した。
「！！！？」
コウヘイは勿論、周りの生徒にも何が起こったのか訳がわからなかった。
「全く、動物だなお前は。嫌なら暴力で解決しようなんて考えはここでは通用しない、それを忘れるな。」
「ち…畜生ッ…」
コウヘイが気を失うなり、何を考えているかわからない無表情で桐生は話を戻した。
「他に質問のある者は？」
しかし先程の光景を目の当たりにした生徒たちは静まりかえり、誰ひとり手を挙げようなどというものはいなかった。
「いないか、なら次の説明に移るぞ。１番大事な話だ…」
生徒たちの緊張は更に高まり、中には桐生の異様さに恐怖して泣きそうになっている者もいた。

「このクラスのことについて。そして、君たちがここですべきことについての二つだ。まず一つ目、このクラスSは今まで君たちが過ごしてきた学園生活とは掛け離れたクラスであるということ。今までのような学園生活はもう送れないだろう。悪いが君たちに選択肢はない。」

するとテッペイがやたら遠回しな言い方をする桐生に質問を投げた。

「一体…どの辺が掛け離れているんだ？」

すると桐生は一言。

「君たちはこの学園生活で命を落とすかもしれない」

「！！！？？？」

一瞬で部屋の中に戦慄が走った。

「命って…どういうことだよ…？」

動揺を隠しきれないテッペイは焦点が合わず、足をわなつかせ蒼白

に顔色を染めた。

「だから死ぬかもしれないと言ったんだ。突拍子もない話だがなぁに心配する必要はない。命に終わりがくるのは必定、当然のことだ。」

桐生の発言にテッペイを含む生徒全員が恐怖で凍りついた。

「し…死ぬ？そんないきなり死ぬだなんて…お前頭おかしいって…！！絶対おかしいって！！」

「嫌だ！！！！ここから出して！！！！出してよ！！！！」

生徒たちは完全にパニックに陥ってしまった。テッペイの隣にいたケイゴにいたっては恐怖のあまり嗚咽さえしている。

「はははは！！！いいリアクションだな。このクラスに割り振られた生徒はそういう反応をするがお前たちほど臆した反応をするやつらは初めてだ！！」

急に態度を変え、上機嫌になった桐生は生徒たちを落ち着かせるために説明を付け加えた。

「死ぬと言っても万が一の場合に限る話だ。いや、億に一つと言ってもいいだろう。君たちが普段生活して事故に遭って死んでしまう、そんなレベルの確率だよ。」

そういうと生徒たちは幾らか穏やかになった。

「そ、そっかぁ…なんだよ。驚かすなよな。」

「ま、このクラスSのホームルームのお約束みたいなもんだ。俺が担任になった以上そんなことはないよ。安心しろ。」

桐生が震えていたケイゴの頭をポンと優しく撫でながらテッペイに向けて言う。

「お前たちがあまりに驚くもんでな。これ以上話を続けるのもなんだ、今は先にここの暮らしに慣れるのが先だな。残りの話は夕飯のときに話すとしよう。お前ら、まず部屋に戻れ。それからは夕飯まで寮内の施設の位置の確認がてら好きに回ってくれ。とりあえず7時には食堂に戻るよう、解散！！」

態度の豹変した桐生が説明を終えると部屋の壁の四方が開き通路になった。

「それじゃあな。また食堂で。時間厳守だぞー」

手をヒラヒラと振りながら桐生が出て行った。

「……はぁ」

テッペイは緊張が解けたのかずるーっと壁に寄り掛かり尻をついた。

「はぁ…疲れた。ケイゴ大丈夫か？」

「うん…。桐生先生もいい人そうで安心したし。とりあえずコウヘイ連れて部屋に行こうよ。」

ケイゴが明るさを取り戻してコウヘイを指す。コウヘイはまだ気を

失っているようだ。

「あぁ、そうだな。いろいろ大変そうだけど、まぁなんとかなるか。それじゃ部屋にいこうぜ。」

ズルズルとコウヘイを引きずりながら二人は部屋を抜け自室へ向かう。

こうして俺たちの人生最悪の学園生活の幕がゆっくりと開けてゆくのだった。

prologue?

通路を歩き続けると俺達は寮の居住スペースにたどり着いた。

「ここに…住むのか？」

寮内とは言ったものの実際のところは寮全体が一つの街と言っていいほどの大きさがあった。窓がないところを見ると恐らく科学都市の地下を使ってこの“寮”は造られているのだろう。それにしても寮内は広く居住スペースに来る途中、娯楽スペースの設備であろう野球グラウンドが見えた。

「ほんとに広いな…ここ。これをクラスS十数人で独占出来るっていったい…」

そう言っていると俺とケイゴで引きずっていたコウヘイが目を覚ました。

「くそ！！よくもやってくれたな！！！って…ここはどこだ？」

「やっと目を覚ましたなコウヘイ。ほいっと。」

手を離すとコウヘイは起き上がって、周りをキョロキョロ見回している。

「クラスSの学生寮だよ。ここはその居住スペース。なんかホテルみたいだね。」

確かに居住スペースはホテルのような造りをしていた。ロビーなどのシステムは完全自動で男子は一階、女子は三階に分けられていた。居住スペース自体は三階までしかなかったが一つ階の広さが尋常じ

ゃなかった。共有施設の食堂や談話室、大浴場など桐生の言ってたとおり暮らしにはなに不自由のない、むしろ今までの生活が貧相だったと思えるほどに充実していた。

「うわー広いロビーだな。さてと、俺の部屋はと…１０１か。」

各々の部屋を確認するなり三人は部屋に向かった。居住スペースの構造を見るに個室に行くには一階の男子用談話室を通らないといけないらしく、三人が談話室に入ると他の男子生徒たちが荷物を置き終えたのか談話室でくつろいでいた。

「おーっす！！これから卒業までよろしくな！！」

テッペイたち三人に声をかけたのは顔立ちのはっきりした筋骨逞しい青年だった。

「おお、カイ！！お前もこのクラスだったのか！！」

清瀬カイ。一回生ながら野球部のエースの地位を獲得した大物ルーキー。その実力と素直な性格が相俟って一回生の人気者である。だから俺もカイとは面識がある。

「なんか最初はひびったけど、楽しい学園生活になりそうだよな！！あ、来る途中グラウンドあったじゃん！？皆で野球しようぜ！？」

「ほんとに野球好きだなカイは。てかそれなら野球部はどうすんだよ！？」

カイは野球が好きだ。それなのにこの生活を送ったら野球部にはいられないのではないか？テッペイが心配そうに尋ねると

「俺は、野球が出来ればそれでいいんだよ。それにさっき桐生に聞いたけど桐生が監督に話をつけてくれたみたいでな、チームの皆もクラスSに行ったことはクラス分けでわかってるだろうし、気にする必要はないよ。」

少し寂しそうにカイが話していると奥の部屋から体格の大きい見覚えのあるやつが出てきた。

「ここ個室も広いんだなーははは！！！お、お前らもクラスSなのか！！よろしくな！！」

「ユウトか！！お前相変わらずでかいな！！これからよろしくな！！」

扇谷ユウト。一回生の頃Bクラスにいた俺の友達。あっけらかんとしている裏表のない性格。見た目どおりの大食漢。エロ大魔神。

「後で娯楽スペース行ってみようぜ。AVコーナーあるぜきっと！！」

「お前も相変わらずなことで…。」

テッペイがちょっと引いていると残りの生徒たちが出てきた。すると7時のチャイムが鳴り始めた。

「え！？もう7時なのか！！」

そういえば、目を覚ましてから時間がわからなかった。窓もないの

で完全に時間がわからなくなっていた。男子生徒たちが二階の食堂へ急ぐ中、テッペイたち三人は個室に荷物を置きに行った。

「ハァ…ハァ…！！！」

三人が食堂へ急ぐと食堂の方から賑やかな声が聴こえた。

「テッペイ！！始まってるよ！！」

「あーもう！！コウヘイ！！お前が気絶なんてしてるから！！」

「それを言うならあの桐生っていけ好かないすました先公のせいだ！！！」

文句を呟きながら食堂の入口に手をかけるとコウヘイが力を入れる前に思い切り扉が開かれた。

「へ？」

バシーン！！！！！

思い切り開かれた扉は開かれた反対側にいたコウヘイの顔面を強く打ちつけた。

「ふぇ…」

バタッ

コウヘイが倒れると扉から酒臭い空気が流れてきた。

「おぉ？なんだおせぇぞ～お前ら」

「桐生ッ！！？」

先程コウヘイをぶん投げたときとは別人のような桐生がテッペイとケイゴを迎えた。

「コウヘイ！！お～い！！コウヘイ！！お前まだ気ぃ失ってるのかよ！！ガハハ！！」

その髭をこしらえた男がコウヘイの顔をぐにゃぐにゃにいじっていると二人はそーっと食堂の中に入っていった。

「おーい！！テッペイ、ケイゴ！！こっちだこっち！！」

カイが手を振りながら空いている席に二人を招く。

「悪い。遅くなった！！」

「いやいや構わねぇよ。さっき始まったところだしな！！それより食べようぜ！！ここの料理美味いぞ、自動調理機とは思えない美味さだ。」

「へぇ、確かに美味そうだな。よし！！食べるか、ケイゴ！！」

「おお、食べよう！！」

テッペイたちが食べはじめるとコウヘイを引きずりながら桐生が戻ってきた。

「あいつまた、引きずられてんのな…」

コウヘイを席に座らせ、桐生が席に着くと大声で叫んだ。

「よしお前ら！！！自己紹介から始めるぞ！！！まずは俺からだ！！」

自分で言っておきながら桐生は自分から自己紹介を始めた。

「クラスS担任桐生アキオ、２８歳！！趣味は筋トレだ！！ガハハハハハ！！何か質問ある奴はいるか！？」

するとテンションが異様に高い女子生徒が桐生に質問をした。

「はぁぁぁぁい～先生～！！先生は結婚していないんですかぁ～？」

顔の赤くなった女子生徒が桐生に尋ねた。きっと桐生がアルコール類を混ぜたのだろう。よく見ると生徒全員のテンションが異様に高くなっていた。

「おお？痛いとこをつくな里枝！！婚約した相手がいたんだがな、ちょっといろいろあってな…ハハ」

桐生が申し訳なさそうな困った顔をした。

「先生もいろいろあったんだね…。ウチもさ、最近彼氏と別れちゃったんだ。だからさ先生！！新しい出会いしようよ！！ウチも応援してるから！！」

里枝が酔いながら桐生に抱きついて慰めた。

「里枝ぁ…お前はいいやつだなぁ！！評価をＡにしてやるぞ！！」

「先生！！！」

（やれやれだな…）

「先生、次行きましょうよ…」

テッペイがやるせなさそうに言うと

「そうだった、そうだった！！次は里枝、お前の番！だ！」

桐生が自分に抱き着いてる里枝を引きはがすと椅子の前に立たせた。

「里枝マイでーす！！一回生の頃はクラスＥでした。野球部のマネやってました。よろしくお願いします！！」

明るく挨拶を終え、里枝が座ると次々と生徒たちが自己紹介を始め最後にテッペイに出番が回ってきた。

「最後はテッペイだな。人付き合いは初めが肝心だぞ～？」

「…初対面で無愛想かつ生徒ぶっ飛ばすやつに言われたくないけどな。」

そうぼやきながらテッペイが椅子から立ち上がった。

「水城テッペイです。一回世のころはクラスＦでした。サッカーやってます。よろしくお願いします。」テッペイの淡泊な挨拶が終わると桐生が再び仕切りはじめた。

「よーし！！全員の自己紹介が終わったな！！次はさっき途中まで説明したクラスＳについて説明するぞ！！先生的には説明が面倒なのでこの映像を見てクラスＳのなんたるかを知れ！！」

そう言って桐生がリモコンのスイッチを押すと食堂の明かりが消え、スクリーンが降りてきた。

「お前らちゃんと見てろよ！！」

そうしてクラスＳの説明ついての内容が編集された映像が流れた。映像は３０分ほど続き、その内容の異常さに生徒たちは再び言葉を失った。どうやらクラスＳは科学都市に突如発生した超常現象を観測し、それが及ぼす被害を防ぎ、あるときは戦闘に及ぶこともあるという話だ。桐生が言ってた死ぬ危険があるというのはこれについてのことだったのだろう。そして最後に告げられた事実、それがエレメンツについてだった。

「エレメンツについては道明寺から説明を受けた方がいいな。おい、道明寺頼む。」

桐生に指名された道明寺モトキという短髪に眼鏡といういかにも知

的さを思わせる生徒が立ち上がり説明を始めた。

「エレメンツ、強いて言うなら私たちの中に備わっている超能力のようなものです。」

「ちょっ…超能力！？」

テッペイより先にコウヘイが驚いた。

「はい、そうですね。もちろん、人によってそれは様々ですが…。例えば物を動かせる能力だったり、空を飛べる能力だったりと様々なエレメンツが存在します。同じように、ここ科学都市エルリアに起こる超常現象も様々です。だから私たちは多様なエレメンツを以て柔軟にそれらの超常現象に対応するために集められたわけです。」

道明寺が説明を済ますとケイゴが質問を投げかけた。

「そのエレメンツってやつはどうすれば使えるようになるの？」

道明寺が応じる。

「それについては学習スペースで理論、養成スペースで実習をメインに鍛練していくことになりますね。」

道明寺が説明終えるとわかったようなわかっていないような顔で頷く生徒一同。その反応を見た道明寺が困ったのか頭をボリボリと掻いた。

「ま、まぁ習うより慣れろってことですよ。明日から少しずつクラスSの授業に慣れていきましょう。」

モトキがそう言った瞬間警告用のブザーが鳴り響いた。

ビーーッ！！ビーーッ！！

「なんだよいきなり！？」

食堂にいた生徒一同が動揺する中、桐生は余裕そうに一同に指示を告げた。

「どうやら、明日からって話は無しだな道明寺！！よし！！お前ら地上に出るぞ！！」

すると桐生の言葉に驚いたのかさっきまで落ち着き払っていた道明寺が声を張り上げた。

「正気ですか先生！？彼らは今日クラスＳに編入したばかりなんですよ！？」

するとさっきまで酔っ払っていたはずの桐生の態度がホームルームのときのような態度に急変した。

「安心しろ。俺がいる限るこいつらには怪我はさえねぇよ。それに先遣でレイやナツミたちが向かってるしな。道明寺、お前がここで過ごした一年をお前が信じてやらねぇでどうする？」

すると道明寺が何かを決心したかのように目を閉じた。

「わかりました。それなら僕は自分のエレメンツの準備をしてきます。」

「おお。期待してるぞ。お前ら非常用エレベーターに乗り込め！！」

戸惑いながら生徒たちは食堂の隅にあるエレベーターに乗り込むと。聞き覚えのある警報アナウンスが流れた。

「ただいま気象庁から厳戒警報が発令されました。被害に備えて自宅、または最寄りのシェルター行きエレベーターに乗ってください。繰り返します…」

「この警報…近頃やたら流れると思ったらそういうことだったのか。」

謎が解けたかのようにテッペイが頷いていると、エレベーターの速度が落ちて行く。いよいよクラスSが地上に出るのだ。

「お前ら、いいか？絶対俺から離れるなよ？ま、そう怖がる必要はねぇよ。大袈裟な警報がなるのはあくまでも民間人を巻き込まないための措置だ。諜報部隊からの連絡だと危険度はFってとこらしいしな！一回生の頃のお前らぐらいの代物だ。」

皮肉気に桐生が冗談を言ってみせるとテッペイはその冗談は桐生が自分たち生徒を落ち着かせるためのものだと言うことを悟り、より一層顔を強張らせた。そしてついに、エレベーターが地上に到着すると、ゆっくりとエレベーターの扉が開いてゆく。

こうして今夜の一件は俺たちクラスSにとって一生忘れられないものになるのだった。

prologue?

エレベーターの扉が開くと信じられない光景が俺達の目の前に現れた。

「な…なんだよ。これ…？」

車や建物の鉄骨が宙を舞い、すでに到着していたクラスＳの生徒に襲い掛かっている。

「おい！！！レイ！！！大丈夫か！？？」

桐生が叫ぶとその青年が振り向く。

「あ！！！兄さ…じゃなくて桐生先生！！」

「バカ野郎！！！こっち見るな！！！後ろ！！！」

レイと呼ばれた青年が再び鉄骨の方を振り向くと既に鉄骨が青年の眼前に迫っていた。

「危ねぇ！！！！！」

思わずテッペイが叫ぶ。

すると青年の黒い手袋のような武装が青白く輝き、間髪入れず振り返りながら鉄骨に裏拳を放った。

「はぁっ！！！！！」

ドガァァッ！！！

すると太い鉄骨がいとも容易く崩れ落ちてしまった。

「ふーっ…びっくりしたなぁ…もう。」

青年は冷や汗をかいたのか額の汗を拭う。

「戦闘中に声掛けるなんて俺を見て死ねって言ってるようなもんだって先生！！そんなこと言われなくても僕は兄さ…じゃなくて先生のことなら穴があくほどよく見て…ってあれ？その人達は？」

呆れたように桐生がうなだれる。

「たしかに俺も悪いが、そのいらんとこまで喋る口はなんとかならねぇのか…？」

「ハハハ！！それは無理な相談だよ先生。なぜって？だってそれは本心なのだから！！」

緊急時に緊張感のないやり取りをする二人を見て生徒たちが沈黙する。

「あ…あー、お前ら、この変な奴が一回生からクラスSでお前らのクラスメイトになる…」

「神埼レイだよ！！よろしく！！」

どよめきながらそれぞれ返事を返す。

「レイ、こいつらが今日からクラスSに編入した新規クラスSメンバーだ。」

「なるほどね！ああ、そういえば今日は始業式だったね！寮の中だと感覚狂うんだよね。うん。」

「まぁ、それはいいとしてナツミとリカコはどうした？」

「ん？あの二人ならある程度状況把握させてモトキのところに向かわせたよ？だからそろそろ…お、きたきた。」

神埼がそう言うなりクラスS全員に先程エレメンツについて説明をした道明寺の声が聞こえてきた。

「…リンク完了。これより、掌握せし全能の知（グラスパー・オープン・ブレイン）を発動する！！」

頭に響いた道明寺の声を聴くなり頭の中に見覚えのない映像が流れ込んできた。

「なんだこれ！？俺、こんな場所知らないぞ！？」

すると今度はここにいないはずの道明寺の声が頭に流れ込んでくる。

「他者の意識と意識を繋ぎ、さらにその仲介となる私の意識を他者に共有させる。これが私のエレメンツ、掌握せし全能の知です。」

するとコウヘイが口を閉じ目をつむって何かを念じ始めた。

「おおすげぇ！！！喋らなくてもケイゴと話が出来る！！」

「ほんとだ！！そんなに顔痛いの？」

「お前ら…」

テッペイが呆れていると、道明寺の指示が頭に流れ込んできた。

「皆さん！！その場所から北東３００ｍ先に強いエレメンツ反応を感じます！！気をつけてください！！」

「わかった！！道明寺！！それとナツミ！！リカコ！！聞こえてるか！？お前らはこっちに戻ってきてクラスＳの生徒たちの保護を担当してほしい！！」

桐生が掌握せし全能の知を介してナツミとリカコという名の生徒に指示を送る。

「わかりました先生！！」

「いまそっち向かいまーす！！」

するとリンクが切れたのか二人の声が聞こえなくなった。

「道明寺、お前も無理するな。お前のそれは脳に負担がかかる力だろ？一度にこの人数をリンクするのは相当きついはずだ。俺が指示する以外は俺とレイ、ナツミ、リカコの四人のリンクのみでかまわん。掌握せし全能の知で俺らが目的地に着いたのを確認したら四人にリンクし直してくれ。」

「はい…助かります。それでは一旦リンクを切るんで、後でまた…。」

すると流れ込んできた道明寺の意識が消えた。

「さぁ、俺達は目的地へ向かうぞ！！何かあればすぐ俺に言え！！」

桐生を先頭にクラスSが歩きだす。無惨に潰れた車の残骸をよけながら慎重に進んでいると後方からさっきの女子生徒二人が追いついてきた。

「やっときたか。遅かったぞ。」

「リカコがこんなときに漏れるとか言い出すんでトイレに寄ったんですよ！！」

「違う違う！！なっちゃんがトイレ行った方がよくない？って言うから申し訳なくて出もしないのにトイレ寄ったの！！」

「あーもうどっちでもいいから。ナツミ早く防御膜を張ってくれ。」

「はいはいー。石人形の守護（ゴーレム・プロテクション）いくよー！！」

ナツミが手をかざすとうっすらとオレンジがかったドーム状の膜が生徒たちを覆った。

「なんだこの膜？あれ？通り抜けるぞ？」

「その膜は内側からは効力を発揮しないけど外側からの物理的干渉を遮断するの。」

桐生はナツミが説明を終えると今度はリカコに指示を出した。

「リカコ、もしものときのためにアレをすぐ出せるようにしておい

てくれ。」
「了解〜」
すると生徒たちの一歩先を歩いていた神埼が何かの異変を察知した。
「先生、多分この先に何かいる！！」
「よし！！レイ、リカコ、ナツミ戦闘配置に着け！！換装したのち道明寺の指示を受けるまで待機だ。」
桐生が手を挙げると三人は前方に走り出し、何かをつぶやくと制服姿から一瞬にして戦闘用の服に変身し、手元が光るや否や、それぞれの武器が現れた。
「うおおお！！！かっけぇぇぇ！！！！！」
それを見ていたコウヘイが興奮のあまり叫ぶ。神埼は相変わらず黒い手袋のような物をつけたままだったが。リカコの手に握られた二本の短剣、ナツミの手足を覆う篭手が、脛当てがこれから始まるであろう壮絶な戦いを予感させ、生徒たちに不安がよぎる。すると桐生たち四人が道明寺からのリンクを傍受し、連絡を受ける。
「そこの十字路を右に曲がった先にある大通りで強力なエレメンツの反応を確認！！幻影（イルシオン）です！！」
「わかった！！よし作戦開始だ！！行け！！」
「了解！！！！」
桐生の指示を受けて、三人が大通りへ向かう。

「三人からの連絡が来たら俺達も動くぞ。準備してろ。」
「……はい。」
生徒たちが大通りの方をじっと見守る。

一方、大通りに向かった神埼たちは先程の鉄骨や車とは比べものにならない幻影に息を呑んでいた。
「これは…警備用のエリミネーターが幻影に憑依されたのか！？？」
三人が見上げた巨大なロボットはテロ対策に軍事が用意した物で、その大きさは軽く１０ｍを越えていた。
「…これは久しぶりに苦戦するかも…ナツミ！！僕らにプロテクトを！！リカコはアレを頼む！！」
ナツミが先程テッペイたちにかけた防御膜よりも濃い膜をレイの手足など局部に集中させ、かける。そしてリカコが精神を研ぎ澄ましゆっくりと閉じていた瞼を開く。
「未来女神の予知眼（スクルド・ヴィジョンアイ）！！」
リカコがエレメンツを発動させると黒かったリカコの瞳が青々とそ

の色を変えた。

「レイくん！！ナッちゃん！！左から、来る！！」

リカコがそう言った瞬間だった。エリミネーターの左手が銃器へと変形しところ構わずガトリングを乱射する。

ガガガガガガガガガガ！！

「ちょっ…ちょっと！！危ないってば！！」

ナツミが建物の陰に隠れる。

「これじゃ攻撃が先読み出来ても近づけない！！レイくん！！どうするの！？」

同じく陰に姿を潜めたリカコが困惑する。

「困ったな…モトキ！！こいつの分析結果は！？？」

すると三人の頭の中に道明寺の意識が流れ込む。

「あのエリミネーターは敵と認識した熱原体を視認次第攻撃を開始する。奴の視界はほとんど人間と変わらないから背後から回り込んで後頭部にある強制停止のスイッチを押せば…なんとか！！」

「回り込むって言ってもなぁ…この大通りじゃ隠れる場所もないし

…」

レイが思考を巡らす。そして自分の出した答えに受け入れる。

「はぁ…仕方ない、僕が囮になる。

その隙にナツミとリカコがあいつの後ろに回り込んで停止スイッチを押す、これでいこう！！」

「何がこれでいこう、だよ！！何考えてんの！？死ぬかもしれないんだよ！？」

ナツミとリカコが激怒する。道明寺がリンクしているとはいえ、その大きな声がレイの頭にはとても響いた。

「い、痛いって！！声でかいって！！てかナツミたちのサポートも必要だから僕の生きるも死ぬのも二人にかかってるんだよ！？だいたい僕が失敗したら次に狙われるのは二人だしどっちが先かってだけだって。」

すると納得したかのようにナツミたちの声が小さくなる。

「わかったよ。でも無茶はしないでね！！！危なくなったらすぐ隠れて！！！！わかった！！？」

またもや二人が大声で叫ぶ。

「わかった！！！！わかったから！！！！声でかいって！！！」

頭痛がしながらも自分を心配してくれるナツミとリカコに照れ臭さを覚え、レイが苦笑する。

「そうと決まったら絶対成功させなきゃな。」

照れ臭そうにレイが屈伸を始めていると屋根に赤い風船が引っ掛かっていた。それがどうにも照れている自分のように見えて一層恥ずかしくなった。まるでそれを誤魔化すかのようにレイが指示を出す。

「な…ナツミは僕に最大限の石人形の守護をかけながら、あいつの後ろへ回り込んでくれ。リカコはその場で待機しつつ未来女神の予知眼で僕たちをサポートを頼む。」

「わかった。絶対成功させよう！！！」

「うん！！！」

レイは屈伸を終えると何かを唱えはじめた。

「汝は風…脈動せし疾風の奇跡…」

するとレイの足が鉄骨を粉砕したときのように青白く輝き始めた。

「準備オーケーだよ。先に僕が出るからナツミはタイミングを見計らって出てきてくれ。」

大通りを挟んで向こう側の建物の陰に隠れているナツミに合図を出す。

「大丈夫。絶対やれる。」

レイの手が3、2、1と指を折り始め、ついにカウントがゼロになった。

「スタート！！！！！」

レイが建物から姿を現し、瓦礫のかけらをエリミネーターにぶつけた。

「よし、かかった！！こっちだ！！！」

エリミネーターが左手から先程のガトリングを打ち出す。

ガガガガガガガガガガ！！！

しかし打ち出された銃弾はレイを捕らえることが出来ない。

「この速さならいける！！」

そして全ての銃弾をかわすと、エリミネーターが弾を補充するため硬直した。

「ナツミ！！！！今だ！！！！！」

今度はナツミが建物から姿を現し、後ろを向いているエリミネーターへと一直線に駆け抜ける。

「はぁ…！！！！はぁ…！！！！あと少し！！」

残り数ｍのところでエリミネーターが再び動き始めた。

「ちっ！！！後少しのところで！！！！ナツミ！！！そのまま走れ！！！！」

するとエリミネーターの全身の装甲が開き無数の銃口がレイを狙う。

「レイくん！！！反応弾が来る！！逃げて！！！」

リカコが未来女神の予知眼を発動させレイに告げた。

「だめだ！！！ここで逃げたら、あいつの視界が動いてナツミがあいつの視界に入る！！」

バシュ！！！バシュ！！！バシュ！！！バシュ！！！バシュ！！！！！バシュ！！！！！バシュ！！！

無数の反応弾がレイ目掛けて発射される。

「ナツミ！！！石人形の守護を！！！」

すると走りながらナツミがレイへと手をかざす。

「石人形の守護…最大！！！」

防御膜を挟んで向こう側にいるレイが見えなくなるほどに濃く、厚いオレンジの壁をナツミが展開する。

「これなら！！！いけるっ！！」

そして反応弾がオレンジの壁へと突き刺さり爆散する。

ドォォォォォン！！！！！！

凄まじい爆音とともに爆炎が巻き起こる。

「レイくん！！？レイくん！！！！」

ナツミたちが叫ぶと、先程と同じように苦笑の混じった声が頭の中に響く。

「だから…声がでかいって…」

すすまみれになりながらレイが建物の壁にもたれる。そして再びエリミネーターが弾の補充のために硬直した。

「よし…これで後は…ナツミ、スイッチを…」

ナツミがエリミネーターの背に飛び移り後頭部へ手を伸ばす。

「え…！？開かない！！ハッチが熱暴走で熔けて動かない！！！」

「そんな…！！？リカコの未来女神の予知眼は！？」

レイがリカコの方を振り向くと、リカコの目の色が再び黒く変わり始めていた。

「ごめんっ…！！！私の目…もうっ…力が残ってな……」

力を使い続けたリカコが建物の陰から倒れ付してその姿があらわになった。

「リカコッ…！！」

するとエリミネーターがナツミに気づき首を反転させる。

「！！」

首を振り回し、回転したエリミネーターの首が防御膜をいとも容易く破り、ナツミの脇腹に直撃した。

ゴキッ！！！！！

「ぐうっ…！！？」

吹き飛ばされたナツミが地面に叩きつけられる。

「ナツミ！！！！！」

エリミネーターが狙いを倒れているナツミに変え、再び全身の装甲を開く。

「また反応弾か…！！！こうなったら…！！！！！」

レイが足に付与した力を解除し、エリミネーターに向かって手を力強くかざす。

「うっ…解放！！！ディメーターズ…」

その時だった。建物の脇から小さな少女が姿を現した。

「なんでこんなとこに…！！？そうか…あのときの風船…！！！！！」

先程の赤い風船がレイの脳裏をよぎる。

「だめだ！！！僕のエレメンツがあの子を巻き込んでしまう！！！」

エレメンツの発動を無理矢理押さえ込み、再びレイは足に力を付与してナツミの元へ駆け付ける。

「くっ…！！！間に合え！！！」

反応弾がナツミ目掛けて打ち出される。

バシュバシュバシュバシュバシュバシュバシュ！！！

「だめだ！！！間に合わない！！！ナツミーーーッ！！！！！！！」

レイが激昂し大声で叫ぶ。己の浅はかさと仲間を守れない弱さが一気に涙となって零れ落ちる。

しかしその刹那、レイの叫びを掻き消すかのように熱風が巻き起こり、熱を増してゆくその風が全ての反応弾を熔かし尽くした。

レイは何が起こったのかと目をきょとんとさせた。

「俺の大事な教え子たちをずいぶん可愛がってくれたみたいだな。鉄屑風情が。」

「兄さ…ん…？」

「おいおい、先生って呼べって言ってるだろ？」

「はは…そうだっ…た…」

ドサッ…

その聞き慣れた声に安堵したのかレイは膝をついて地面に倒れた。

「よく頑張ったなお前ら。後は俺に任せろ。」

すでに倒れている三人に聞こえるはずがないその言葉を、桐生が独り言のように呟き、エリミネーターに向かって歩き出す。

「全くよぉ…幻影たちはクラスSで処理するっつってんのに軍のやつらが介入してきたと思ったらこのざまだ。」

またもや反応弾の充填を始めるエリミネーターに向かって桐生が手をかざす。

「させねぇよ。」

たちまちゴウッと熱風が巻き起こるとエリミネーターの銃口が溶解し、銃口が塞がれ、反応弾が内部で暴発した。

ドォォォォォン！！！！

一瞬にして桐生の言ったとおり“鉄屑”と化したエリミネーターを素通りし、倒れた三人を担ぐ。

「おい、お前らも見てないで肩かしてやれ。」

エレメンツの戦いを目の当たりにして呆然と立ち尽くしていた生徒たちが桐生の元に集まり倒れた三人に肩を貸して担ぐ。

「ったく…無茶しやがってお前らはよ…」

ポンと三人の頭を撫でると、すぐに救護班が駆け付け三人を運んでいった。テッペイが運ばれていった三人を複雑そうな面持ちで見送る。

「あんなにぼろぼろになって、死ぬかもしれないのに戦うのか…」

他の生徒が沈黙しているなか、テッペイが一人つぶやいた。

こうしてクラスSの編入初日が幕を閉じた。

days?

昨夜の戦いを終え、俺達は寮に戻るなり談話室で眠りについてしまった。

それも当然だ。あんな戦いを目の当たりにしたのだ。みんな精神的に相当堪えたのだろう。俺が起きたとき、まだ誰も目を覚ましていなかった。

「…ここは？」

談話室のソファから起き上がり、辺りを見回すとクラスSの面々が死んだようにぐっすりと眠っていた。

「そっか…ここは家じゃないんだった。」

立ち上がって個室の洗面所へ向かい、顔を洗う。

とにかく何もしないではいられなかった。

何かしていないと昨日の戦いを思い出してしまう気がした。

しかしそれでも、忘れようとすればするほど昨日の光景が蘇ってくる。

「夢じゃないんだな…昨日のことは。」

今になってようやく恐怖を感じ始めたのか、足が震え出し、ひどい吐き気が襲い掛かる。

「うっ…」

俺は洗面所に首をつっこみ、吐き気が治まるまで何度も何度も吐いた。

「うぅっ…くそっ…！！なんで俺…こんなとこにいるんだよ…」

やっと吐き気が治まった俺は再び談話室へ戻る。

「こいつらもきっと同じなんだよな…いきなりこんなとこに連れてこられて、あんなもの見せられて、俺…いつか死ぬのか？」

昨日の戦いで負傷した三人は命に別状はなかったものの、きっとしばらくは戦いに復帰できないだろう。

もし…もし今また昨日みたいなことが起こったら？

考えれば考えるほどネガティブな回答しか思い浮かばない。

「怖い…」

しばらくすると談話室の窓から光が差し込んできた。

「あれ？居住スペースには窓があったのか？ん？そもそもここって地下だよな？」

不思議に思った俺は居住スペースの外に出ることにした。

「こ…これは！！」

寮内はたしかに地下のはずなのに、昨日まで俺が過ごした、見慣れた空がそこにはあった。俺が言葉を失い、その美しい朝日を見つめていたら誰かが起きたのか、声を掛けてきた。

「すっげぇだろ？この朝日？ホログラムとは思えないよな？」

「えーっと…たしか…」

「ヨウスケだ。柏原ヨウスケ。」

「そうか、俺はテッペイ。水城テッペイだ。よろしくな。」

俺が返事をすると、ヨウスケは手に持っていた飲み物を一本渡してきた。

「飲めよ。とりあえず乾杯だ。」

「ありがとうヨウスケ、それじゃ乾杯。」

お互い缶を軽く合わせ、それを口に持っていく。

「ちょっ…！！？朝からビールかよ！！」

ラベルの張られてない無機質な缶だったので完全に油断していた。
驚いた俺をヨウスケが笑った。
「はは！！そんな驚くことないだろ？お前、面白いやつだな！！」
ヨウスケのゆるさにペースが乱される。
「そういや、なんでこんなホログラムがあるんだ？趣向にしては随分と規模がでかいぞ。」
するとヨウスケは更に上機嫌になり自慢げに語り始めた。
「知りたいか！？知りたいだろ！？実はな…これ、俺が作ったんだぜ？」
俺はすごい勢いで話すヨウスケに再び驚いてしまった。
「え…マジで？」
「マジ。」
俺はもう一度そのホログラムの朝日を眺める。偽物とは思えない朝日が少しずつ東から昇ってゆく。
「すごいな…本物だと思った。」
「だろ？俺が一回生のころに造ったんだ。」
「へぇ…あ！！そういや聞いたことある。一回生の頃、集会のときに授賞式でホログラムがなんとかって…」

「あの頃は勉強も面倒で、何か造るしかやることなかったんだけどな…」

「いや、それで充分だよ。俺はその頃何をしてたんだろう？何が出来たんだろう？」

「今になってあの頃がどんなに平和だったのかがわかるよ。俺はその平和に甘えて何にもしなかった。ただ好きなモノを造ってきただけだった。でも、今はそれだけじゃないんだって思うんだ。」

「それだけじゃ…ない？」

俺が求めていた問いの回答をこの男は知っている。そんな気がした。

「ああ。俺がこのエルリアの為に、誰かを守る為に何かが出来る、ってこと。」

その答えに俺はは唖然とした。俺は自分のことばかりしか考えていなかった。そうだ。ここで戦う力を身につけたらヴァレイの皆を、母さんを守れるかもしれない。でも、それでも昨夜のことを思い出してしまうと、体が震えてしまう。

しかし、よく見るとビール缶を握るヨウスケの手もまた震えていた。

「へへ…偉そうなこと言っておきながら情けないよな。さすがに昨日のアレはちょっと信じられなかった…。」

ヨウスケの震える手に俺は自分の手を添えた。

「！？お前…」

「俺もだ。別に情けなくてもいいじゃん。俺はお前の言葉を聞くまでずっと怖がってばっかだったよ。でもさ、ヨウスケの言葉でさ、俺にも出来ること見つけられるんじゃないかなって思ったんだ。だから俺はお前がすごいと思うよ。」

俺はそんなつもりなかったが、ヨウスケに手を添えつつ放った俺の言葉に、何か思うものがあったようで、ヨウスケの強張った笑顔は柔らかく温かい笑顔に変わった。

「お前さ…俺のこと口説いてんのか？」

ヨウスケが冗談っぽく尋ねてきた。

「は？え…なんでだよ？」

「いや、この手がさ…そろそろ恥ずかしくなってきたと言うか…べ…別に嫌じゃないんだけどな！！」

やっと俺はヨウスケの言った言葉の意味を理解し、慌てて添えていた手を放した。

「なっ！！！ち、違うって！！！ただ、お前のことすごいなって思ってたら…なんかこう…」

照れはじめた俺を見てヨウスケは再び優しく微笑んだ。

「普通に嬉しかったよ。ありがとうな、テッペイ。それにしてもお前って素直すぎ！！うっかりこっち系の人かと思ったわ！！」

「違うっつの！！！何なんだよお前は！！俺の称賛の言葉を返せ！！今ここで返せ！！」

「ははははは！！！！面白いやつだなお前！！！」

俺がキレたのを余所にヨウスケが腹を抱えて爆笑する。

しばらくすると目を覚まして、俺達がいないのに気づいた他の生徒たちが外に出てきた。

「おー、こんなとこにいたのかお前らー」

「いたいたテッペイ！！」

「てか何だよこの朝日は！？」

俺の中のさっきまでの不安な気持ちはすっかり消え去り、皆の様子を見たヨウスケが俺の方を向いて言った。

「それになテッペイ。俺達は一人じゃないんだ。例え今までの日常を失ったとしても、俺達には仲間がいる、守りたいものもある。今はそれで充分だと思わないか？」

ヨウスケはそう言って立ち上がるとベンチに座っていた俺に手を差し延べた。

俺はヨウスケの言葉に応えるかのように、その差し延べられた手をとった。

美しい朝日を背に俺は立ち上がるとこれからの運命を共にするであろう仲間たちのもとへ向かう。

ああ、そうだヨウスケ。

俺達は一人じゃない。

days?

目を覚ますと、そこにはあの時と同じ天井が見える。治療室で眠っていた僕は体を起こそうとしたがどうにも起き上がらない。昨日の戦いの途中でエリミネーターが放った反応弾の衝撃で壁に体をひどく打ち付けてしまったようだ。

「そうか、僕は…昨日。そうだ…ナツミとリカコは…？」

体が動かないので目を横に動かすと、同じように眠っているナツミとリカコがいた。息はしているみたいだったので命に別状はないみたいだ。

「あーあ…久しぶりに負けちゃったな…しかも他の生徒たちも見てたのに…」

強く拳を握りしめる。歯痒い。あんなやつ普段ならどうという相手じゃなかったのに。

しかし、仲間への配慮や判断力の甘さなど敗因はいくらでも見つかる。

「やっぱり僕は一人でしか…」

しかし、その先の言葉を口にすることは出来なかった。もし口にしてしまったら僕はあの頃の自分に戻ってしまう、そんな気がした。

「やめよう…てか体が動かないんじゃ仕方ないか…もう一眠りしよう。」

再び目を閉じるが眠れない。街はどうなったんだろう？いろいろと思索を巡らせているとプシューと治療室のドアが開く音がした。兄さ…先生だ。とりあえず眠ったふりをしておいた。

先生が僕たち三人を見回す。大事に至らないのを確認すると僕のベッドの横に置いてあった椅子に腰を掛けた。

「久しぶりにやられちまったな。」

そう呟くと先生が僕の頭を撫でた。これは…なかなか嬉しい。ほんの少し目を開けて先生の顔を覗く。その顔は軽口を叩いていたとは思えない辛辣な表情を浮かべていた。

「すまなかった…お前はきっと悔しかっただろう。せっかく初めて誰かと組んだ作戦だったのにな。」

そう。僕は今回の作戦が行われるまで、一人で作戦に赴いてきた。僕のエレメンツの性質上、周りの人間も巻き込んでしまうのが、今現在のところ最も適当な理由だ。

でも今回の作戦は僕の強い希望でチームを組ませてもらったんだ。普段は一緒に過ごしているのに作戦のときには一人になってしまう。そんな疎外感が辛かったんだろう。それがチームを組もうとした理由なのかもしれない。ただの我が儘だったんだ。僕の我が儘で大切な仲間を傷つけてしまった。

だからこそ僕の本心を射ぬいた先生の言葉が苦しくて僕は先生の服の袖をつかんだ。

「レイ…起きてたのか。」

「先生…僕だめだったよ。やっぱり今まで通り一人でやるよ、これからは。」

「それでお前はいいのか？」

「うん…少なくともう僕からはもうチーム組むなんて言わないよ。これ以上僕の我が儘で誰かを傷付けたくないから。」

「そうか…でもなレイ、それはお前のせいじゃないんだ。もちろん、ナツミのせいでもリカコのせいでもない。」
兄さんが僕の掴んでいた手をにぎりしめる。

「兄さん…」

「今は特別に見逃してやるよ。」

その優しさに触れた僕は堪えきれず、また泣いてしまった。

「ったく…お前はいつまでたっても泣き虫だな…」

兄さんの手はとても大きくて普段の筋トレのせいかゴツゴツしていた。それでも、僕にとってその温かい手は何にも代えられない安らぎを与えてくれるのだ。

「兄さん…さっきはありがとう。兄さんが来てくれなかったら、僕たち死んでた…」

「お前らを守るのが俺の役目だからな。役割を果たしただけだ。そ

れに…」

「それに…？」

「お前がいなくなったら、俺の家族は俺一人になる…」

「兄さん…」

その言葉を聞いただけで僕の心は救われた気がした。すると恥ずかしさのあまり、会話が途切れてしまった。なんとか会話を続けようと、言葉を探す。

「あー、そうだ…皆は？戦闘を見たのは初めてでしょ？結構堪えてるんじゃないかな？」

すると兄さんは何かを思い出した。

「あ、チャイムの時間だ。そろそろ行かねぇと。」

兄さんは立ち上がるとニヤッと何かを思いついたかのように微笑んだ。

「おいレイ、目つむれ。」

「え…？うん。」

何かを仕出かすのだろう、それは予想出来た。そうと知りつつ僕が目を閉じると、まさかの出来事が起きた。

「な…！？」

唇に何かが触れるのを感じた僕はまさか兄さんがそんなことをするなんてと驚き、とっさに目を開いた。

目の前には兄さんの顔。恐る恐る目を口元の方へ移すと、兄さんも目を開いた。

「なんだぁ？目開けちまったのか？」

すると指を二本合わせ僕の口元にそれを当てていた。

「な…何やってんだよ！？」

驚きのあまり体を起こすが、背中に痛みが走る。

「いた！！いたたた！！！」

兄さんは満足したらしく、笑い声を上げて治療室を後にする。

「がっはっは！！！そんだけ元気なら大丈夫だな！！ナツミとリカコはともかくお前は明日から授業出ろよー！！じゃあまた後でなー！！」

馬鹿でかい声で廊下をかけていく兄さんの足音が聞こえなくなると、僕は再び体をベッドに倒した。

「ああ…不覚だ。」

しばらくすると僕は再び眠りについた。今度の眠りは深く、穏やかに眠れると思った。

そして兄さんの言っていたチャイムが鳴り響いた。

days?

再び居住スペースに戻った俺達は、談話室に用意されたソファに座った。俺とヨウスケ以外の生徒たちの様子が暗い。やはり昨日の戦いが頭から離れないようだ。

しばらく沈黙が続いた後、コウヘイがソファから立ち上がるといきなり声を上げた。

「決めた！！！！！！俺は逃げなぇ！！！！！何かよくわからねぇが俺はあいつらと戦う！！！そしてこの都市の平和は俺が守ってみせる！！！！」

俺がヨウスケに言われてやっと気づいたその思いをコウヘイが数分のうちに考えついてしまった。というかいつもの勢いで言ったものであろうが。それでも一度決めたらやり通すまで諦めない、コウヘイの不屈の精神を俺は知っていた。だから俺は、コウヘイの言葉を後押しした。

「そうだ！！コウヘイ！！俺達もあの力を手に入れてこの都市を、ヴァレイの友達を、家族を守ろうぜ！！」

テッペイの意図を汲んだのか、ヨウスケも言葉を付け加えた。

「そうだ皆！！俺達はこれから卒業までの二年間、運命を分かち合う仲間だ。何も一人で背負うことはない。辛いときは皆で支え合ってさ、絶対ここを卒業しようぜ？」

するとカイやユウトも同意してくれたのか、立ち上がり、決意を表した。

「これはこれで面白そうだな！！でも休みのときはみんな野球しようぜ！！！」

「俺もそうだな…今までの暮らしより意味のある暮らしになればそれも悪くはないって思う。何よりここ、１８禁コーナー充実しすぎ！！！！」

相変わらずの野球バカとエロバカっぷりであっさり決心してしまった二人。しかし、その目には揺るがない意志を感じた。すると生徒たちのテンションが上がったのか、会話が弾み出した。

「いやぁ野球というものはな！！！」

「てかお前いつの間にかＡＶコーナー行ったんだよ！！」

「おいお腹すいたぞそろそろ！！」

コウヘイがそう言うなり皆の腹が鳴る。思わず皆吹き出してしまった。するとタイミングよく、チャイムが鳴る。

キーンコーンカーンコーン

すると桐生の声が聴こえた。
「おはようお前ら！！よく眠れたか？いよいよ今日からクラスＳの授業が始まるぞ！！２階の食堂で朝飯を済ませたら８時までに学習スペースへ移動してくれ！！以上だ！！」
まるで何もなかったかのように桐生はあっけらかんとした声でアナウンスを繰り返す。
「とりあえず朝飯だな。」
皆が立ち上がり食堂へ向かった。

食堂では昨日のことがまるでなかったかのように賑やかに朝食をとった。
すると女子たちも起きてきて、空いている席に次々と座り始めた。
「おーっす！！テッペイ、おはよう！！」
「おお！？朝から元気いいな里枝。」
話しかけてきた里枝は俺の向かいに座って朝食をとりはじめた。
「マイでいいよーそれにしてもさー昨日のアレ！！びっくりしたよ

ね！！映画みたいだったー」

いきなりマイが昨日のことについて話を振ってきた。マイの様子を見るに、特に深刻には考えていない様子に見えたが俺は念のためマイに尋ねてみた。

「これから先、もしあんな状況に陥ったらマイはどうするつもりなんだ？」

すると少し悩んだ様子で俺の問いに答えた。

「うーん…出来る限りのことをウチはやるだけ、かな？」

「そっか…どいつもこいつも器がでかいというか、なんか…すごいな」

「そんなことないよー。ウチさ、野球部のマネージャーやってたって言ってたでしょ？ウチ、ほんとはソフトボールやりたくてさ。一応、中等部ではやってたんだけどさ。周りについていけなくて諦めちゃったんだ。」

「そうだったのか…」

「それ以来、自分のこと諦めちゃうようになったんだよねー。だからこそさ、ここでもう一回ウチにしか出来ないことをさ、やってみようかと思うんだ。」

やっぱり皆どこかで願ってるんだ。今まで出来なかったことをもう一度ここで頑張ってみようって。マイの意志を感じた俺は敬意の言葉を贈った。

「マイなら出来るさ。卒業まで頑張っていこう」

そうやって俺は残っていたおかずの唐揚げをマイに差し出した。

「くれるの！？ありがとね！！」

「気にすんな。てか、そろそろ行かねぇと授業始まるぞ？」

俺は時計の針を指す。すると驚いたマイはいっきに朝食を喉にかき込み、ペロリと平らげた。

「す…すげぇな…」

「まぁ元体育会系だからね！！じゃあまた教室でね、テッペイ！！」

俺より後に来たはずのマイは颯爽と食堂を出て行った。

「俺も急がなきゃな。」

俺もマイに続いて教室を後にした。

居住スペースを後にすると、俺は教室のある学習へ向かった。寮内が広く、ホログラムがあるため屋外にいるように感じる。学習スペ

ースまでの距離があるためなんだか、登校しているような気分になった。そんなことを思いつつ歩いていると、後ろから誰かが走りながらこちらに近づいてくるのを感じた。

「ねぇ！！そこの男！！あんたクラスＳの生徒よね！？」

唐突に聞かれたので俺は、一歩退いた。なんだ？なんでこんなに馴れ馴れしいんだこいつ？

そう思ったが一応答えてやった。

「ああ、そうだけど…。てかクラスＳじゃなきゃこんなとこいないって。」

「そっかぁ！！よかった！！てかあんた名前は！？」

やっぱり変な女だ。

絡むと余計なことになりそうだったので適当に応対してさっさと教室行こう…

「俺は水城テッペイ、てか授業始まるから、急いでるんだ俺。悪いな。」

そう言ってその場から立ち去ろうとすると…

「ちょっと待ちなさいよ！！あんた、初対面の相手にその態度ってどうなの！？」

いきなりキレたその女は俺の制服を掴んで離さない。だいたい初対面でいきなりキレるのもどうかと思う。

「そういうお前はなんなんだよいきなり！！初対面なのにそのでかい態度はなんだ！！」

「はぁ！？何！？口答えするの！？そんな死んだ魚みたいな目してる分際で随分と言ってくれるのね！！」

これまでかと言わんばかりに暴言をぶつけてくる女。ウザい。ほんとウザい！！

「てかさぁ…そもそもなんでお前俺に話しかけてきたんだよ？なんかあったんじゃないのか？」

話を本題に戻す。適当に流せそうにないのでさっさとこいつが話しかけてきた理由を問いただす。

「そうよ！！それよ！！あたしはあんたに聞きたいことがあったの！！」

そういってその女は俺に近づいてくる。なんだ！？まさか…これがツンデレってやつか！？急に緊張してきた俺はその女の目を見つめるしかなかった。

「教室どこ？」

「へ…？」

予想外の言葉に俺は力が抜ける。

「何？いきなりこんなに近づいてきてこの女、俺に気があるのか？とでも思ったの？不潔…ほんと不潔ね。ま、今回は初めてってことで見逃してあげるからさっさと教室の場所教えなさいよ。」

この女の自意識の過剰さといい不遜な物言いといい、正直我慢の限界だったが、初めてということで俺も許してやった。

「なんだ、それなら俺も行くとこだしよかったら一緒に行かないか？」

するとその女は目を細めて汚い物でも見るかのような目で俺を見つめた。

「…懲りないのねあんたも。ま、いいわ。あたしはマキ、折原マキよ。」

折原マキ。

聞いたことがある。

たしか一回生の頃クラスCの男を全員豚奴隷にしたという生粋の女王様とかなんとか。

「ああ…よろしく。折原。」

「ところであんた、そうね…あんたって言うのもアレだし、犬！！！！」

「犬！？？ちょっと待てなんで俺が犬なんだよ！？」

「なんで？嫌なの？珍しいわね。いきなりこのあたしに犬って呼んでもらえる人なんて滅多にいないのよ？」

「まず人のこと犬呼ばわりするやつが滅多にいねぇよ！！俺にはテッペイって名前があるんだ！！そんな変なあだ名で呼ぶな。」

「ところで犬。あたしと立ち話したい気もわかるけどそろそろ行かないと授業に遅れるわ。」

「無視かよ…」

仕方ないので俺は犬というあだ名をありがたく頂戴することになった。

学習スペースが見えるあたりまで来ると、ちらほらと他の生徒が登校しているのが見えた。

「あそこが学習スペースね！！後は一人で大丈夫よ犬。ご苦労だったわ。」

相変わらず偉そうな物言いだが、構うのも疲れるので、適当にあしらった。

「はいはい、じゃあまた後でなー」

俺がそう言うと、マキは楽しそうに学習スペースへ向かっていった。

「はぁ…なんで朝からこんなに疲れなきゃいけないんだ…俺」

とぼとぼと学習スペースへ向かっていく。

こうしてクラスS初の登校を終え、俺は学習スペース内へ入り、教室へ向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2540ba/

Good bye days～それでも僕たちは生きていく～

2012年1月8日23時55分発行